

国境の意識を持つことの重要性について

執行役員 熊本 義宏

はじめに

昨年はベルリンの壁が崩壊し冷戦が終結してから30年が経過した年でした。その時に、壁が崩れていく様、ブランデンブルグ門の前で喚起にわく市民の姿は今でも記憶に残っています。壁崩壊の7年前であった1982年、学生であった私は、西側と東側の諸国の境界として存在していた壁を実際に見てみたいとの思いを強く持ち、西ドイツや西ベルリンとともに、壁を越えて東ベルリン、さらには東ドイツにまで足を延ばそうと考えました。

その当時の状況としては、デタントが叫ばれていたいわゆる冷戦末期で冷戦後の新たな世界の可能性について夢を持って論じられていた時代で、その象徴である国境として建設していた壁の存在がクローズアップされていました。海に囲まれていた日本に留まっていたは、この陸続きの国境という概念はなかなか理解しがたい部分があると感じ、何とかその実態を見たいと思ったわけで、この計画を実行に移しました。

オランダの首都アムステルダム空港に降り立った後、近郊のアメルズフォート駅からワルシャワ行の列車に乗り一路ベルリンを目指しました。ベルリンに行くためには、西ドイツ領内から一旦国境を越えて東ドイツ領内に入り、唯一の西ベルリンにおける停車駅である動物園駅で降りなければなりません。列車が東ドイツ内に入ると、時計と外の景色を幾度となく見ながら緊張感の下にワンチャンスの停車を待っていたことを覚えています。

東西ベルリンには高いコンクリート製の壁が立ちはだかつており、その両側に障害物が設置され保安用地が確保されていました。ブランデンブルグ門もその線上にあり、その前を兵士が警戒しているのが見えました。第2次世界大戦後、ドイツは東西に分離されましたが、西側の経済成長を背景に、表面化した経済的格差を知った東側の住民が豊かさを求めて国境を越えて流入する者が増え、東ドイツはついに耐え切れなくなり、往来をシャットアウトできるような壁を整備することとなりました。しかしながら、壁を越えようとする試みが絶えず、強化された警備網の中で犠牲者も多数に及びました。壁を間近に観察し、境界の重さを深く認識した次第です。東ベルリンに行くには外国人が唯一通過することができるゲートであるチェックポイント・チャーリーでの入国審査を受けなければなりません。更に、東ドイツ入国のための審査で、ビザの確認を受け、通貨も西ドイツマルクから東ドイツマルクに窓口で指定された通り1対1のレートで交換しました。実勢レートよりは割安であったと記憶しています。

入国後、ポーランドのワルシャワ行き列車に乗り東ドイツのライプチヒに向かいました。西ベルリンの華やかな街の雰囲気とは対照的に、東ドイツのライプチヒ、ドレスデン、ワイマールは歴史のある街並みは感じられつつも、華やかさは感じられませんでした。数少ない商店には商品不足か

らか長い行列ができており、メイン通りを一ブロック入ると第2次大戦での空爆の後が未だ残っており、東西の格差を垣間見ることができました。東西諸国の第一線としての国境を隔てて、双方の国が大きく異なっている現実を深く認識しました。

国境と国境を接する国々における諸問題

隣接した国がそれぞれの領土を区分するのが国境です。地続きか海、湖、河川などを隔てたものまで様々な状況がありますが、両国の緊張度の度合いで単なる標識が設置されているところから壁や障害物などが築かれている場合、また警備隊の配置まで千差万別の形態を示しています。国境を挟み資源獲得の度合や農産物の生産条件が異なる、港などへの主要流通経路を抑えるといった経済的要因や、かつて領有していた、同民族が生活しているなど歴史的な要因が存在し、更には、土地そのものの価値というよりも、政略的に軍事拠点としての価値が高いなど、国境を挟んで領土問題の原因となっている例が世界中に存在します。これらは、国境を挟むが故に現出化する問題であり、双方とも妥協できない性質のもので、一見、論理的には解決可能に見えても、実際には長年に亘って係争を続けてきている問題はたくさんあり、このことから国境を挟むことの現実を深く認識することの重要性を表しています。各地には各地なりの事情があり、背景も条件も異なった状況があります。

我が国は海に囲まれていますので、国境は、海上若しくは、国境に近接する島嶼において主として認識されることとなります。南西諸島においては、尖閣諸島に対する中国からの脅威が現出し、竹島に係わる韓国との問題や北方領土に係わるロシアとの問題など課題を抱えています。これらの問題を背景として、我が国としては領土領海領空の保全のために、自衛隊を始め、各種機関がそれぞれの役割を果たすべく日夜努力を継続しているところです。

本稿では、我が国が有していない陸続きの国境についての状況や諸問題という視点から、海に囲まれた我が国の国境に関する捉え方について参考にできることを見出そうとしています。特性が異なるので直接的に適用できるものではないと思いますが、国境を取り巻く背景や環境が及ぼす影響の大きさを認識することができます。そして、国境意識を持つことの重要性も理解できると考えます。

本誌令和元年11・12月号に掲載したように、昨年、ビザなし渡航で北方領土を訪れた際には、我が国とロシアとの認識にずれがあるので、国境との概念が難しいですが、入域の際に、ビザこそはありませんでしたが、ロシア側国境管理職員の前に、研修団員はひとりひとり立たされ、写真と我々の顔の照らし合わせを受けました。いわゆる面通しの様な有り様です。彼らが権威を誇っているようにも見え、また、国境を越えた「入国」なんだとの無言の主張にも感じました。この領域の戦略的価値や漁業資源などを考えれば、その帰趨が極めて大きな意味を持つことを互いに認識しているので、ロシア側の態度同様に、我が国としても領土なのだとの強い意志を表す必要があると感じた次第です。これも国境意識を深く保持することの重要性を表しているものと感じます。

次項から、私がこれまでに訪れたことのある国境の様子を引用しながら、それぞれが抱える諸問題について紹介し、国境の認識を持つことの重要性について述べてみたいと思います。取り上げるのは、下図の示すコソボとアルバニアの国境、コンゴ民主共和国とルワンダ・ウガンダの国境、エチオピアとエリトリアの国境の3つの地域です。

コソボとアルバニアの国境

コソボは2008年に独立宣言をしました。ロシアや中国を始め国内に事情を抱える国々は未だ独立を認めてはいませんが、それでも101か国が承認をしています。私がコソボに降り立ったのは2003年で、まだ特別自治区として国連が行政を担っていた時代でした。ウィーンからプリステーナまで民航機に乗り、国連コソボミッション（UNMIK）の主要施設を研修しました。その後、当地の治安維持を担うため北大西洋条約機構（NATO）指揮の下に展開しているコソボ治安維持部隊（KFOR）を訪問しました。コソボ南西部を担当するドイツ軍部隊が本部を置くプレズレンにおいて、活動状況などのブリーフィングを受けた後に、アルバニア中央部からコソボ南部とをつなぐルート上の国境である峠に向かいました。

コソボの地は、中世の時代にはセルビア王国が統治していましたが、オスマン帝国の侵攻を受け、その大激戦の中で双方ともに指揮官たる王様を含む多大な犠牲を出した末にオスマントルコが統治することとなりました。セルビア人にとってコソボの地はたいへん重要な地域として認識されています。一方、アルバニア人にとっては、オスマン帝国によるセルビア正教の移転を契機としたアルバニア人の移住により当地における定住化が進んだことで地域の重要性を認識しています。その後、アルバニア人の人口が増大したことにより人口比が高まり、相対的に多数を占めることとなっていきました。オスマン帝国の統治が終了し、その後、ユーゴスラビアのセルビアに属する自治州の一つとなりました。チトーの死後、冷戦終結に伴い構成する国々は独立していく中で、コソボの帰趨はセルビアの傘下に入るのか、アルバニアが多数を占める状況で独立の道を選ぶのか、主要国を巻き込んだ枠組みの中で模索の道が進んでいました。

1998年に勃発したコソボ紛争では、ユーゴスラビア軍及びセルビア人勢力と、コソボ独立を求めるアルバニア人の武装組織コソボ解放軍（KLA）との戦闘が繰り返えされ、内戦状態に陥り、民族浄化などを含む凄惨な戦いが続きました。その様な状況の中で、KFORが展開し治安維持を図ることとなりました。ユーゴスラビア軍の介入により、多数のアルバニア人が難民化しアルバニアに流入することとなりました。その当時、アルバニアは経済状況の悪化などによる混乱で無政府状態化していたこともあり、コソボ内のアルバニア勢力への支援のために大量の武器が持ち込まれ、更には、麻薬流入のルートになってしまいました。2003年当時のKFORの重要な任務は、境界を越えて持ち込まれる武器や麻薬の流入を防ぐために、チェックを厳格に行うことでした。そのため、境界を跨ぐ主要な経路上の監視を厳重にするとともに、様々なアクセスからの流入を抑えるために、領域内の道路を通行する自動車や馬車などを対象とした検問を設け、本人確認や荷物確認などを行うといった光景が頻繁に見られました。中には、農場や牧場を行き来する牛車に武器などを隠し持っていたなどといったケースもあったようです。

この様な武器や麻薬の流入が現地の安定を妨げる大きな要因であると深刻にとらえていて、KFORは厳しく検問を続けていました。検問所があるわけではなく、道路上を通行する一般車両を任意に停車させて乗車の人たちや車内のチェックをするわけです。その当時、まだ不安定化している状況でしたので、KFORの検査チームは銃を構えた護衛のもとに車両に近付き、人員・車両のチェックしていました。

国境を挟むということは、隣国の状況が直接影響することであり、この場合、アルバニアの国内事情がコソボの情勢を更に悪化させてしまいました。アルバニア人は、同じ民族の帰趨に係わることもあり国境を越えて武器や資金の援助がなされ、それが内戦を複雑化する要素にもなってしまったわけです。

コソボへの武器密輸としては大きく、アルバニアからのルート、セルビアからのルート及びモンテネグロからのルートの3方向が認識されていて、特に、このアルバニアからのルートはコソボ国内での主としてコソボ解放軍(KLA)への武器援助の手段として使われてきたことに加えて、マケドニア旧ユーゴスラビア共和国への流入の中継経路としての性格もありました。麻薬についてはアフガニスタンなどから欧州への密輸ルートの一つとも言われていて、地域の安定を越えて欧州全体への影響をも憂慮していました。このように、主要ルート上の国境管理を厳格にすることは、隣接国の情勢以上に、地域全体の問題に影響を及ぼすとの性格があり、このことを深く認識する必要があります。

コンゴ民主共和国とルワンダ・ウガンダとの国境

中部アフリカに位置するコンゴ民主共和国の東部国境の町ブカブおよびブニアを訪れたのは2004年、ンクンダ将軍率いる反政府勢力が活動を活発化させている中、国連PKO部隊の対応が厳しさを増している時期でした。ブカブはキブ湖南部にあつてルワンダに隣接する町であり、ブニアはアルバート湖に面しウガンダに隣接する町です。コンゴというより旧国名のザイールといった方が馴染みがあるかもしれませんが、1994年のルワンダ大虐殺の結果、多くの難民がルワンダから国境を越えて流入してきました。当時、大きな人道問題になり我が国も自衛隊をゴマに派遣しました。ゴマの南約百キロの町ブカブは、ゴマとともに多くの難民が流入した地域です。

それらの町には難民キャンプが散在し、多数の難民が厳しい環境の中での生活を余儀なくされていました。ブニア、ブカブ、ゴマはそれぞれ地方の主要な都市ですが、アフリカで最大の国土を持つコンゴ民主共和国の中で、都市間の連絡交通が必ずしも整備されているわけではなく、例えば、北東部に位置するイツリ州の州都ブニアまでは首都キンシャサから幹線道路が通じていますが、雨季には道路損傷が生じ通行不可能な状態になることもあります。人口は36万ほどの都市ですが、そこに10万もの難民が押し寄せてきたわけですから、町としての収容能力をはるかに超えています。そのため、インフラがない中で食料もなく、多数の難民は厳しい環境の下で生活を強いられているのです。古いコンクリートや石造りの家並みが散在する町中に対して、隣接した地域に木を杭にして

ビニールシートを広げただけの空間に家族が身を寄せ合っていました。

ブカブやゴマでは、ルワンダでの大虐殺の対象となりつつ、政権を取り返した側（ツチ族主体）からの仕返しを恐れて首謀者側（フツ族主体）が国境を越えてザイールに逃げて多数の難民キャンプができていきました。しかしながら、再びルワンダの政権を奪還しようとする勢力が難民キャンプから国境を越えて活動したことにより、ルワンダ政府も国境を越えて対処行動を始めたわけです。しかも、ザイールでは弱体化した政権に反抗する勢力がルワンダの動きに呼応して国内での攻勢を強めていきました。

一方、ブニアではレンドゥ族とヘマ族がツチ族とフツ族の関係と同様に、植民地時代の統治を背景とした民族闘争を引き起こし、ルワンダ大虐殺に触発され問題が拡大し、その紛争に隣国のウガンダが介入を始めました。

ルワンダやウガンダといった隣接する諸外国が介入する要因としては、民族間の争いをベースとしていることは確かですが、ダイヤモンド、金、コバルト、コルタンといったたいへん価値のある鉱物が当該地域で産出するというのも要因の一つとなっています。

地続きの国境を接することで、資源算出の度合いで互いがその獲得のために様々な手段を講じることは枚挙にいとまがありません。また、国内の情勢の変化で住民の移動が始まり難民化することも大きな特徴です。更に、不安定化した情勢においては、難民を受け入れている、または受け入れざるを得ない当該国の意向に係わらず、反政府勢力の根拠地にもなりかねず、そこで事象が生じると両国間の問題へと拡大する可能性も秘めています。

また、かつての植民地時代の統治に一方の民族を優遇するというやり方をとったことから、独立後に民族問題のくすぶりが消えず、ルワンダ大虐殺の様な要因が引き金になって問題が表面化することになりました。それら民族間の闘争に政権争いをもつなげたことから、全土を揺るがす問題となってしまいました。更に、隣接国はこれらコンゴの国内問題に対して、様々な思惑を持って介入することとなり、アフリカ世界戦争といわれるように周辺国をも巻き込む問題となってしまいました。

隣国の情勢がこのように直接的な影響を及ぼすのも、陸続きの国境があったからに他なりません。

終わりに

我が国は陸地での国境を有していないことから、地を接する国境がある故に起こり得る様々な状況とそれに関わる利害関係、そして紛争について身近に実感することが少ないのが現実です。従って、世界中で起こっている事象を中々自分のこととして認識することは難しいというのが実態です。しかしながら、国境は地であろうが海であろうが厳然として存在し、そこでは様々な観点で利害関係が生じ、紛争の種になり得る要素が含まれています。

先に述べましたが、現に、南西諸島を始め我が国の領海や島嶼などにおいて、様々な脅威を認識しつつ、警戒監視の手を緩めず、領土領海領空の保全に努力を継続しています。

また、国境ではありませんが、国の権利を規定するという意味では、大陸棚延長の問題もあげられます。大陸棚延長が認められれば、当該領域での資源利用など排他的な権利が認められますので、延長のための努力はたいへん重要です。しかしながら、その努力を阻止しようとする近隣諸国の動向も無視することはできません。

2012年、大陸棚限界委員会（CLCS）に我が国が申請していた大陸棚延長について、審査の結果、約31万平方^キもの広大な海域が認められました。我が国は7つの海域について申請していましたが、沖ノ鳥島、沖大東島、南硫黄島などに挟まれたEEZの空白海域となっている四国海盆海域（SKB）や小笠原海台海域（OGP）に加え、沖大東海嶺南方海域（ODR）や南硫黄島海域（MIT）について申請海域の一部が認められました。審査過程においては、中国、韓国から沖ノ鳥島を島と認めないとの主張がなされました。我が国はそもそも領有権についての係争がないにもかかわらず異論を出すこと自体が不相当であるとした反論などにより強く主張し、そのほとんどが認められました。九州パラオ海嶺南部海域（KPR）については、パラオとの関係なども考慮し継続審査になっています。大陸棚限界の延長が持つ大きな影響を深く認識している証でしょうが、切り込もうとする関係国の思惑が垣間見えた次第です。

また、この海域では中国は海底地形名の申請においても積極的な行動をとっています。近年、中国は我が国の大陸棚周辺の地形について命名申請を続けていて、2018年には79件もの申請を行っています。この区域は直接国境を接しているわけではありませんが、領域の大きな価値に対して様々な揺さぶりで独自の権益拡大を企図する近隣諸国の動きに対して国民として深く認識する必要があります。大陸棚延長や海底地形名について継続的に行われている地道な努力に対して敬意を表する次第です。

このように、我が国は、海に囲まれています。地続きの国境に対して生じている様々な要因に似通った状況が起こっています。洋上の国境については、特に、尖閣諸島、北方領土や竹島を巡り、中国、ロシア、韓国との間での現状が存在し、しかもそれが固定的にとらえられているわけではなく、現在進行形で動きが続いています。こういった現状ではありますが、国境の意識を明確に持ちつつ、様々な要因を考慮しながら、絶えず保全努力を怠らないことが領土領海領空保全の基本であると考えます。